

沢木耕太郎

第三便 飛光よ、飛光よ

# 深夜特急

新潮社

NDIE  
LANTIQUE  
me  
ON - NEW-YORK

沢木耕太郎

第三便 飛光よ、飛光よ

# 深夜待急

新潮社

# 深夜待急

第三便 飛光よ、飛光よ

発行——一九九二年一〇月二五日

七刷——一九九三年二月一〇日

著者——沢木耕太郎

装幀——平野甲賀

装画——カッサンドル

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——  
営業部 (03) 三二六六—五一  
編集部 (03) 三二六六—五四

振替——東京四—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

© Kôlaro Sawaki 1992, Printed in Japan

● 価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社讀者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327507-3 C0026

深夜特急・第三便・目次

## 第十三章 使者として

トルコ

アンカラで、使者としての役割を果たした私は、イスタンブールに着くと、アジア・ヨーロッパ間を往復するフェリーで「五リラ五十クルシュの優雅な旅」を楽しんだ……

## 第十四章 客人志願

ギリシャ

101

何かが違っている——私はトルコからギリシャに入ること、アジアからヨーロッパへ、イスラムからキリスト教圏へ、茶の国からコーヒーの国へ来てしまっていた……

## 第十五章 絹と酒

地中海からの手紙

173

僕は、いま、世界中の宝石を打ち砕いて敷きつめたような、壮麗な海の上にいます。しかし、船の上で僕が感じていたのは、不思議なことに深い喪失感だったのです……

## 第六章 ローマの休日

南ヨーロッパ I

187

ミケランジェロの『ピエタ』に衝撃をうけ、61歳のアン王女と束の間の『ローマの休日』を過ごした私は、ウェネチア行きを取り止めて、一路、モナコのカジノを目指す……

## 第七章 果ての岬

南ヨーロッパ II

251

マドリッドで、昼は蚤の市をひやかし、夜は居酒屋をはしごして、<sup>「無」</sup>に蝕まれていた私は、ポルトガルの果ての岬サグレスで「旅の終り」の汐どきをようやく掴まえた……

## 第八章 飛光よ、飛光よ

終結

313

パリで数週間を過ごしたあと、ロンドンに向かった。税関で多少のトラブルはあったものの無事終着点に着いた私は、日本への電報を打ちに中央郵便局に出掛けたが……



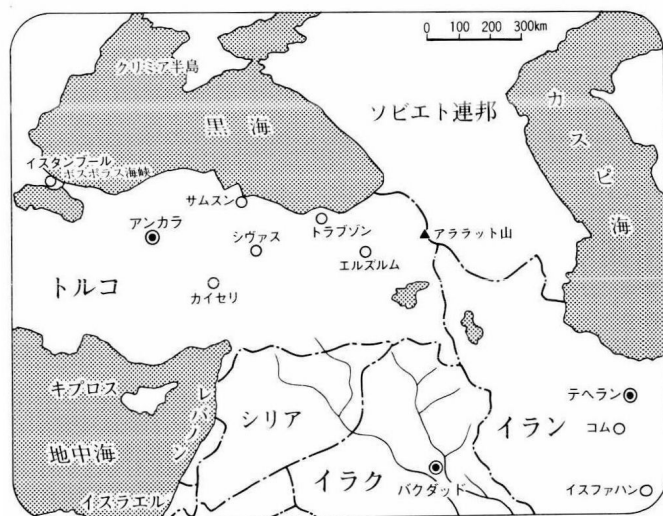
# 深夜特急

第三便 飛光よ、飛光よ





|             |    |
|-------------|----|
| ひと忘れ……………   | 三〇 |
| 賀状……………     | 三三 |
| 手紙のこと……………  | 三五 |
| 電話のこと……………  | 四〇 |
| テレビのこと…………… | 四三 |
| 薬の広告……………   | 四七 |
| 夫と妻……………    | 四九 |
| 雀……………      | 五二 |
| 専門家……………    | 五四 |



# 1

テヘランに着いたのは、夕方の六時前だった。

イスファハンを午前十時に出るバスに乗ったから、途中の休憩時間を差し引くと、ほぼ七時間で来たことになる。テヘランから南下する際は夜行だったため、沿道の風景がまったく見られなかったが、北上する今度は飽きるほど眺めることができた。とりわけ、イラン最大の聖地であるコムのモスクは美しかった。夕陽をいっぱいに浴びて、黄金のドームが眩しいくらいに輝いていた。

しかし秋の日は、やはりイランでも急速に暮れていき、バスがターミナルに着いた時にはすっかり暗くなっていた。その夜は、とにかくアミール・カビールまで行き、ベッドの空いているどこかの安宿に転がり込むつもりでいた。ところが、バスの屋根に積まれていたザックを受け取り、何十台ものバスが連なって停ま<sup>と</sup>っている暗い道を歩きはじめて、そうだ、と思いつくことがあった。

しばらくはアミール・カビール周辺の安宿に泊まるにしても、いずれ何日かすればトルコに向かわなくてはならない。テヘランからならアララット山の麓<sup>もと</sup>を通ってエルズルムに抜けていくルートになるだろう。そのバスの時間がどうなっているか、いくつかのバス会社で確かめておこうと思ったのだ。

まずは、ここ三回ほど続けて乗って、かなり満足していたミーハンの事務所を探した。ようやく見つかり、そこで何やら書きものをしていた中年の事務員に、

「エルズルム行きバスは……」

と訊ねかけると、パッと顔を上げた事務員が、大声で叫んだ。

「急げ！」

私がぼんやりしていると、椅子から腰を浮かして斜め右の方向を指差し、また叫んだ。

「急げ、出てしまふぞ！」

どうやら、今まさにエルズルム行きのバスが発券するところであるらしい。それがわかって、私はのんびりと言った。

「いいんだ、今日の便に乗るつもりはないから」

すると、事務員は脅かさないでくれよというように片手を振り、腰を下ろした。

「で、次のはいつなんだい？」

私が訊ねると、事務員はこともなげに言い放った。

「次の金曜」

ということとは、一週間も後ということではないか。

今度は私が慌てる番だった。いくらなんでも、用事のなくなったテヘランで、一週間も無為に過ごすのは辛すぎる。

「まだ乗れるか？」

私が他にもバス会社があるのをすっかり忘れ、急ぎ込むように訊ねると、事務員は大きく頷いて言った。

「走れ！」

私はザックを背負ったまま走り出した。だが、何十台も駐車しているバスのどれがエルズルム行きかまるでわからない。少し走っては、バスの周辺に屯している人々に訊ねなくてはならなかった。

「エルズルム？」

誰かが首を振り、別の誰かが指差してくれる。そこでまた私は教えられた方向へ走り出す。そんなことを何度か繰り返しているうちに、ようやくエルズルム行きのバスに辿り着いた。

間一髪だった。荷物係が運転手の脇の席に腰を下ろし、まさにドアが閉められようとする寸前だったからだ。

「エルズルム？」

バスの中に向かって大声で訊ねると、運転手と荷物係の二人が、口々に、そうだ、そうだ、というような意味の言葉を発する。

私はホッとしてザックを肩から下ろした。荷物係が降りてきて、そのザックをバスの胴体部分の荷物収納スペースに入れようとする。そこで、私は彼と料金の交渉を始めた。

「エルズルムまで、いくら？」

「七百五十リアル」

その時、私はイランの通貨であるリアルをほとんど持っていないことに気がついた。

これまでどの国でも、使い残すことを恐れて、一度にたくさん両替しないようにしていた。多くの場合、レートがいい闇の両替屋を利用していたため、余っても再両替できなかったからだ。私がこれまで通過してきたような国では、銀行における正規の両替証明書がないかぎり、自国の通貨を他国の通貨に両替することを拒むのが普通だった。

テヘランで使う分のリアルはイスファハンで替えておくつもりだったが、ちょうどこの日が休日の金曜だったためにできなかったのだ。

「代金はドルでもいいか？」

私が訊ねると、運転席から運転手が大きく頷いて言った。

「オーケー、オーケー」

「ドルではいくら？」

私がさらに訊ねると、運転手と荷物係がなにごとかペルシャ語で言葉を交わし、十二ドル、と手で示した。

七百五十リアルは確かに十一ドルから十二ドルに相当する。それは必ずしも不当な言い分ではなかったが、試しに、「冗談じゃない、もっと安いはずだろう、と押してみると、思いがけず素直に十一ドルに値下げしてきた。

「もう少し安く」

私が粘ると、二人は顔を見合わせ、どうしたものかという表情になった。どうやら、七百五十リアルは掛け値なしの料金だったらしい。私を乗せたいのでストリートに値段を提示してきたようなのだ。考えてみれば、同じバスを走らせるなら、ひとりでも多くの客を乗せたいと思うのは人情だ。窓越しにバスの中をうかがうと、まだかなりの空席がある。私は俄然強気になりかかったが、ここで延々と交渉しているとそれだけ出発が遅れることになり、他の乗客に迷惑をかけることになる。適当なところを手を打った方がよさそうだと判断し、あと少しだけまけてくれないか、日本風に言えば、ちょっとはイロをつけてよ、というニュアンスのジェスチャーをすると、運転手と荷物係はまた顔を見合わせ、ふたこと、みこと相談し、十ドル半という値段をつけてきた。

そこで私は十ドル札を取り出し、

「これでいいことにしよう！」

と勢いよく日本語で言い、笑って荷物係と握手すると、向こうもなんとなく笑いながら手を握り返してきた。その瞬間、自分が交渉慣れというより、交渉擦れしてきたような気がして、微かな嫌悪感を覚えた。

私は後部の空いている席に坐った。乗客は大半がイラン人とトルコ人のようだったが、中央より後ろの座席に何組かの外国人がいた。バスが走り出してしばらくすると、自己紹介というほど改まったものではなかったが、外国人同士が言葉を交わすようになり、それで互いがどの国の人間であるかがわかってきた。私の斜め前に坐っている白人の男性はアメリカ人、その前に坐っている七、八歳の少年を連れた若いカップルはフランス人、そして私の席のひとつおいた前の二席に坐っている肌の浅黒い四人組はスリランカ人。

斜め前のアメリカ人は、このようなバスに乗っての旅に似つかわしくないほど小ざつぱりとした服装をしており、それでいてどこか年齢不詳なところのある不思議な雰囲気を持った男だった。トルコからイラクに入るとのことだった。ビザはどうしたのかと訊ねると、ビザは必要ないと言う。アメリカ人はイラクに入るのにビザが要らないのかと訊ねると、私には必要ないのだと言う。そうか、ビジネスなのか。私が訊ねると、そうではないと言う。私には彼がいったいどのような種類の人物なのか見当もつかなかった。

見当がつかないと言えば、フランス人の親子連れもわかりにくかった。男と女はヒッピー風の格好をしているが、もしそうだとすると少年は学校にも行かず旅を続けていることになる。気になったの



は、少年の眼に、外界に対する途方もない無関心の色が浮かんでいたことだ。恐らくは、若い両親に付き従ってさまざまな土地を流れ歩いているうちに、好奇心というものが摩耗してしまっただろう。それに比べれば、これからドイツまで行くというスリランカの男たちの目的ははっきりしていた。スリランカからインドに渡り、中近東を経てヨーロッパに出稼ぎに行くのだという。彼らもまたユーラシア大陸を股にかけた往来者のひとりだった。

イランからトルコへ向かうこのバスは妙に静かだった。客が比較的少ないということもあったのだろうが、いつも乗客のざわめきの中でバスに乗っていた私にとって、その静けさにはどこか物足りないうものが感じられた。聞こえてくるのは、スリランカ人の男たちがたまに囁き合う声くらいである。アメリカ人に確かめると、このバスはイスタンブールまで行くことになっており、途中エルズルトとアンカラに寄るが、エルズルト到着は明日の夜になるだろうということだった。イスファハンからテヘランまでの七時間を合わせると、三十時間以上もバスに乗りつづけなければならないことになる。そう思うと、いささかうんざりしてきた。

午後八時半にバスは街道沿いの食堂に停まって休憩した。乗客はそこで少し遅い夕食をとることにした。

私はイランとのお別れに、自分で勝手にトリメシと名付けていた鶏肉入りポウロ、つまりチキン・ピラフを食べることにした。イランでは、このチキン・ピラフにだいたい世話になったからだ。値段は八十リアル、約三百六十円。決して安くはない。私の近くの席ではスリランカ人がつましい食事をしていて。ひとりがチャイを貰い、それをみんなで飲みまわしながら、バスに乗る前に買い込んでおいたらしいパンをかじっていた。

やがて荷物係に告げられていた休憩時間が過ぎ、乗客はぼつぼつとバスに戻りはじめた。私は乗る